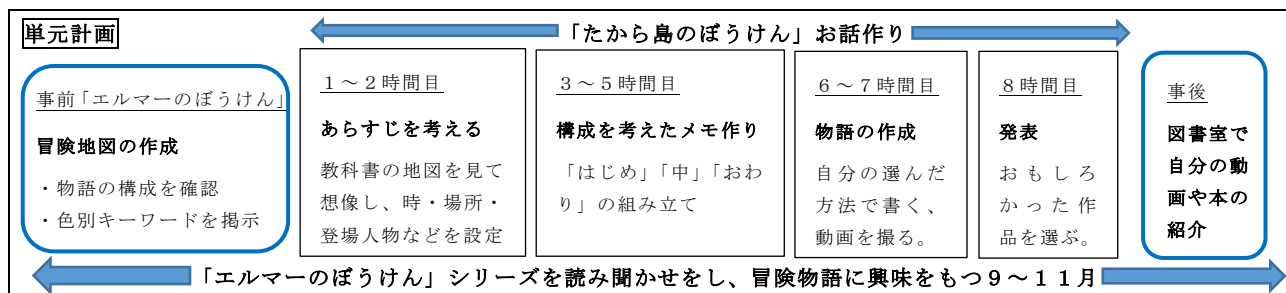


公立小学校通常学級での教科指導における外国人児童への日本語支援  
 —3年JSL国語科「たから島のぼうけん」考えた物語を自分の選んだ方法で発表しよう—

古橋水無（ 東海地区の小学校 ）

1. 子どもの課題と授業の目標

本発表では、東海地区の公立小学校における在籍学級での文科省の「JSLカリキュラム」に基づき実施した国語科3年生の実践とその成果を検討する。本学級29名の中には、外国人児童が3名在籍し、3名とも日本で生まれ、日本で育っている。しかし、文章を構成する力や状況を説明する力が弱く、書くことに意味や楽しさを見いだせない子や、耳からの情報はよく入り、語彙も豊富で話すことは好きだが、文字での情報が入らず、文を読んだり、文を整理して書いたりすることができない子がいる。そのため国語科「書く」の学習では、書くことを負担に感じている。そこで、絵地図をもとに「はじめ」「中」「終わり」の物語の構成を考え、冒険物語を作る活動を通し、最後まで興味をもち、楽しく物語を作ることを目標として、以下の支援を考え実践した。



2. 構成を考えるための支援

まず、最後まで物語を作りたいという気持ちをもち、書くイメージを広げられるようにするために、単元に入る前に「エルマーのぼうけん」の読み聞かせを行い、物語文の構成を確認した。その際、扉絵にかかれた冒険地図を拡大してパネルに貼り、エルマーの冒険地図を作成した。冒険の内容が一目で分かるように、登場人物や道具、出会った動物、起こった事件とその解決方法を項目ごとに分け、色の違うカードに書き、地図上に整理した。また、物語を解決するためにどのような言葉（動詞…アイテムを使う、拾う等）が使われているかも併せて地図にまとめた。

児童たちは、この話がとても気に入ったため、教師はさらにこのシリーズの読み聞かせをした。また、教室に「エルマーのぼうけん」コーナーを作り、3冊のシリーズ本を置いていつでも読めるようにした。そのため、先が知りたい児童たちは、進んで手に取ったり、借りたり、本を購入してもらって読んだりする姿が見られた。冒険地図を作る頃には、大半の児童は話の筋が頭に入っており、登場人物や道具、動物との出会い、事件の解決方法等は、すらすらと答えることができた。地図を作成したことにより、物語についての情報が整理されたのか、この単元に入る前から、「お話を早く書きたい」、「楽しみだ」と口々に言っていた。さらに、書く活動に入ってから、冒険地図のパネルを見返し、エルマーの言葉や行動を自分の物語に取り入れている姿が見られた。

3. 文をくわしくする支援

本単元では、構成を考えるために「はじめ」「中」「おわり」の組み立てで、メモ作りを行う活動が大切になる。そこで、最も苦手意識のある「中」を書く際に、出来事と会話を色の違う付箋を用いて、どこに何を書けばよいか明確にした。分かりやすく整理できるよう、一つの付箋に一

つの文(入れる出来事は2つまで)を書くこととした。また、互いにアドバイスをもらえるよう、物語を書く、動画を撮るなど、発表方法が同じ児童でグループを組み、活動した。メモをくわしくするためにいくつかの修飾語をボード(AUカード)で示し、児童が参考にできるようにした。

修飾語を使う練習のために「エルマーのぼうけんで、修飾語を入れた文を作ってみよう」と提案すると、児童たちは「エルマーは、次の日の夜、みかん島から動物島まで、小さなびよんびよこ岩を急いでわたりました。」等、ボードを真似して文を作り、すらすら書くことができた。また、「メモ」を書く活動では、修飾語の入れ忘れを防ぐために、二つ程度の修飾語を入れて書くよう指示した。そのため、どこで、どんな、何を、等の言葉を入れ、文をくわしくすることができた。しかし、一つの付箋に一つの文という約束が守られず、複数の文をつなげて書いていた。そのため、文を書く時の約束を毎時間振り返り修正していくことで、読み手に分かりやすい文を書けるようにした。さらに、出来事と会話を色の違う付箋に書いたことで、児童たちは、会話を入れることを意識して、文を書き進めることができた。交流では、書きたいことが抜けないように「アドバイスカード(出来事の前、事件、出来事の解決、会話文が入っているか)」で確認できるようにしたため、抜けてしまった部分に気付くことができた。

#### 4. 発表の負担を減らす支援

まず、書くことの負担を減らすために、「中」を書く際には、教材文中の地図を基に、宝物に向けて進んでいく中で、どこで何に遭遇するか道筋を考えたり、遭遇する動物の数を児童の力に合わせて選べるようにしたりした。次に、表現方法を選べるようにした。意欲を継続させ、よりお話作りを楽しむことにつながると考え、自分が考えた物語を書いてもよいし、メモを見ながら話して動画に撮ってもよいことにした。

文をくわしくするために取り入れたグループ学習であったが、教師が個別に支援せずとも友達同士で話し合い、相談し、自分達で解決する姿が見られた。友達同士で書きたいことが入っているか確認し、試しに動画で撮影する際には、日本人児童が、すらすらと文を読むことができない外国人児童に寄り添い、声を合わせながら一緒に読む姿が見られた。また、気軽に声を掛け合って、文を直す姿も見られた。動画の前でメモを見ながら話すことは、大まかに話の流れをつかんでいる外国人児童や書くことの苦手な児童にとっては、書いたとおりに言わなければならないという縛りがなかったため、気持ちが楽になったためか、毎回少しずつ話は変わるが、楽しみながら話すことができた。また、どちらの表現にも興味をもっていた児童は、物語を書くことと動画で話すことの両方に取り組んだ。そのため、個々の能力に合った活動となった。

#### 5. 考察

本単元では、全ての児童が楽しみながら冒険物語を書き上げることができた。学習意欲を継続させ、よりお話作りを楽しむことにつながったのは、導入の工夫により、児童たちが「エルマーのぼうけん」の世界に魅了されたためだと思われる。池上(2015)は、学習への興味関心について、外国人の子どもの場合、日本語の力が十分ではないことで教材文の内容理解も進まず、興味関心をもつきっかけを得るのも容易ではないと述べている。今回の実践では、構成を考えるために行った支援により、このような日本語の力が十分ではない外国人児童にも興味関心をもつ一要因になったと考える。

#### 【引用文献】

齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子編(2015)『外国人児童生徒の学びを創る授業実践』くろしお出版